

現代西洋における創価学会運動

ブライアン・R・ウィルソン

中野 毅 訳

一 西洋社会の変化と

伝統的キリスト教の不適合

西洋諸国における創価学会の成功と、その原因を理解するためには、まずはじめに、西洋社会の社会構造と文化的状況における最近の変化について、そしてまた創価学会がどのような宗教的事情の中で展開したかを、概観しておく必要があるでしょう。

何世紀の間、キリスト教は西洋世界の宗教としては事実上独占的な地位を享受してきました。しかし、この

半世紀間に、前例のないほど様々な宗教組織が生まれてきました。旅行や移動、通信手段などの革命的な発展の結果、地域に根づいていた慣習や知識は相対化され、新しい宗教的理念や実践を体験してみようと願望する人々を次第々々に生み出していったのです。

その一つの帰結として、キリスト教が過去に生み出し、支えてきたエートスが大きく侵食されました。キリスト教の倫理では、自己の欲望を極端に否定し、怠惰やわがまま、暴飲暴食などの不摂生を強く非難しました。キリスト教では、この世における人間の幸福などは、い

かなる意味においても、称賛するにたるもの、または価値あるものであるとは決して考えなかったのです。

キリスト教の禁欲倫理は、西洋社会を経済や教育の面で大きく進展させた自己規律や社会秩序、市民参加の精神などの型を形成する上で、疑いもなく大きな影響を及ぼしてきました。特にプロテスタンティズムは、合理的な行動を人々に促し、次第に合理化された社会制度の形成を推進したのです。その過程でさらに迷信的なものを除去し、科学の発展を促しました。キリスト教の教えは「自己抑制の精神」や、さらには、自分の欲求を抑ええつける「自己抑圧」ともいえる態度を生み出したと言わざるを得ません。そうした雰囲気の中で、個人は宗教的訓戒に應えて、自分の希望や欲求の満足を犠牲にするか、少なくとも先に（死後に）延ばすことを求められたのです。

この禁欲倫理は、当時の西洋社会の条件に、まさに適したものでした。経済的にまだ貧しく、生活は困難で、病気による死も多く、飢饉や、そして戦争も絶え間なく起こり、毎日の生活は死と隣り合わせでした。そうした

状況の中で、厳しい道德命令によって規制された、慎ましく節制した簡素な生活、また市民としての責任ある平静な行動を推奨する禁欲的な倫理と、死後に天国に行くことによってすべてが報われると説くキリスト教の倫理は、両立できるものであり、適切なものでした。堪え忍ぶことを説く宗教倫理は、人々に毎日の欠乏生活をがまんさせたからです。

しかし、個人的な満足を死後に延期させる、この耐乏を説く倫理は、あるひとつの意図せざる帰結を生み出しました。それは結果として、未来の繁栄を生み出す資本や財産を次第に蓄積させ、科学やテクノロジーを進展させる過程を整えたのです。すべてが欠乏していた時代において、人々の最大の関心は生産でした。

宗教倫理と経済的状況が、見事に一致していた例を挙げましょう。キリスト教の四旬節または受難節とよばれる制度（二月の末から四月初旬にかけて）が、どれほど経済的に都合が良かったかを考えてみて下さい。毎年この時期は、厳しい冬の季節であり、敬虔なキリスト教徒は自堕落な浪費を戒めただけでなく、文字通りの禁

欲、即ち六週間から四十日間の断食・節制を宗教的義務として守ることを勧められたのです。その教えを守ることは、宗教的に意義ある、正しい信仰であると主張されたのです。

十九世紀から始まり、二十世紀にはますます加速された西洋の消費社会への移行は、様々な変化をもたらしました。しかし、宗教が変化する速度は、社会の変化に比べて極めて遅いものでした。それは強力な制度によって身を固め、高価で素晴らしい調度品や建物を蓄積し、何世代にもわたって専門的聖職者を訓練し維持するために莫大な投資を行ってきました。宗教はほとんど例外なく、自分たちが提唱する真理を時代を超えて有効なものとなし、その真理をもとに展開された宗教的理念も、また変化に対して抵抗したのです。かくして、急速に社会が発展する現代においては、西洋のキリスト教は次第々々に時代に取残されるものとなっていたのです。

キリスト教の理念がかつては一致していたと見なした社会——経済的基盤は、いまや変化していったのです。生

産中心の社会は、いまや消費中心の社会になり、経済発展が崩壊しない限り、永久に増大する消費に依存することになりました。

かくして次第に、古い、宗教的に綿密に定められた禁欲主義は、もはや変化してしまつた経済に適した倫理ではなくなり、むしろ増え続ける生産物がさらに要求する消費中心の経済行動の新しいパターンへの障害物となりました。

出現しつつある消費社会が要求したのは、人々に好きなものを選択させる倫理であり、それは人生を楽しむ、満足したいという欲求を正当化するものでした。それは幸福のための様々な製品への要求を、それらの物質を提供する生産能力に適應させる必要がありました。消費を正しいものと保証する倫理は、新しい科学技術の発展や資本の蓄積によって可能となつた、高い経済的生産力にまさに見合つたものでした。消費は、もはや非難されるべきことではなくなり、喜びや楽しみも、咎められることではなくなりました。人生は、死後における至福の状態を保証するための猶予期間ではなくなり、「人生は、

生きていくことのためにある」ようになったのです。

社会経済的秩序が必要とする倫理的基盤が方向を大きく変えたにもかかわらず、キリスト教は揺るぎませんでした。キリスト教は禁欲倫理を何世紀にもわたって強調していたため、消費を正しいものと認めて、喜びや放縦、幸福の追求を正当化することは簡単にはできませんでした。ギアを反対に入れて走り出すことはできなかったのです。

このひび割れ、つまり経済的繁栄と教会がとる禁欲的道德の教えの不一致が、キリスト教を信仰しようとする選択する人々の割合を次第々々に減少させていく一つの要因であつたでしょう。ますます大きくなる広告産業と娯楽産業は、全く異なるメッセージを広めていきました。——それはより快樂主義的な倫理に基づき、通信手段の革命がもたらした強力なハイテク技術によって、また教会の反対を歯牙にもかけない資源の膨大な消費によつて推進されるものでした。現代社会は、次第にメディアによつて広められた新しい価値を正しいものと認めるようになり、それはまた日常生活の中の暗黙の命令のよ

うなものになつてしまつたのです。

同時に、こうした露骨な快樂主義が公然と唱えられることによつて、ある真空状態が生まれました。——精神全体のありかたや、慈悲の価値（他人への共感）、社会への関心、市民としての責任感、無私の善意など、かつて古い禁欲倫理によつて身を固めていた、これらの諸価値が、新しい経済的風潮を伴う露骨な物質主義によつて無視されてしまつたのです。

キリスト教の禁欲主義が、その経済的存在理由を失うにつれ、慈悲や愛をもたらし価値を保証した、かつての効力も失つてしまつたのです。このようにして、新しいタイプの宗教、つまり一方で新しい経済的インパルスに倫理的に一致し、他方で、精神的宗教的なレベルでヒューマニスティックな方向性を保つた宗教的精神を好む、社会的雰囲気が生まれていったのです。

二 創価学会運動の展開と魅力の源泉

——十の特徴

そのような状況の中に、創価学会はやってきました。

もちろん、創価学会は東洋からイギリスに新しく紹介された唯一の宗教運動ではありません。しかし、他の運動の中には、伝統的なキリスト教と同じくらい禁欲的な運動もあれば、それ以上に厳しい運動もありました。

創価学会は、それらとは異なった道徳的伝統を代表しており、抑制と報酬の間の新しいバランスを示していました。——つまり個人の行動と満足との関係に対する異なった論理を提供していたのです。自己否定と、個人の満足を死後へ延期する思想に代わって、創価学会は柔軟性のない道徳規則を拒否しました。各個人は、自身の行動に責任をとるべきであり、慈悲や誠実さ、不屈の精神などの、極めて一般的で抽象的な原理に従って行動することに、自身が責任をとるべきであり、責任ある行動をとり、自分自身の人生に責任をとるならば、楽しみを慎む必要はなく、むしろこの世での幸福と（車や、ワインなどの）良い品物をエンジョイすべきであると主張したのです。実際には、宗教実践の勤勉な遂行によって、個人が冥益または精神的幸福とともに、顕益としての物質的功德をうけることを保証すると考えられてい

ます。

快樂主義の哲学をすべてそのまま認めているわけではありませんが、創価学会の教えは現代の消費社会が要求する倫理と適合するものでした。各個人は自分自身の行動に責任を負わなければなりません、創価学会のメンバーは、他方、日々の行動との関連で、その責任感を涵養するものは一体何なのかという問題を決定するのは、各人の自由に任されていました。同時に、彼らは生活に役立つ良い品物を捨てたり、控えたりする必要はないとも教えられていました。かれらは世俗的文化を積極的に利用したり、人生の様々な側面で、自分の才能を活かし、視野を広げたり、道徳的な価値判断を避けたりなどの、人間的な努力に対して積極的な態度で立ち向かうことも勧められていたのです。

従って、創価学会の宗教行為の異国的な特徴、たとえば古代文字の使用や唱題という目新しい行為、御本尊の崇拜などの特徴にもかかわらず、この信仰は現代の彼らの生活と見事に調和することを発見し、そして、それは利益があり、生活を高める実践であると主張する西洋人

が次第に増えてきたことは、何ら驚くべきことではありません。

イギリス人の大多数は宗教的表現の必要性をほとんど見出しませんが、彼らの日々の生活を導いてくれるものや、精神治療の経験、そしてかれらの一般的な倫理観を正当と保証するものは必要としていました。それでは、そうした人々に対し、創価学会のどのような魅力が、どのような社会的位置にいる人々に対して、効果的だったのでしょうか。

創価学会の魅力の源泉は、様々な特徴を含んでいます。その第一は、通常の人々による在家運動であったこととでしょう。——つまり他の形態の仏教と異なり、創価学会は坊主臭くなかったのです。

第二に、それは実主義、または実用主義的な理念を強くもっています。つまり、創価学会は日常生活における様々な出来事に適合した倫理であり、宗教なのです。

第三に、それは救済という概念について多様な形式を提供しました。——つまり、唱題は、人々に総合的な善意を生み出すためであるし、また、利他的な目標のため

でもあり、物質的であれ精神的であれ個人的利益（功德）のためであって、西洋人がますます信じなくなってきた、死後の至福の生のためだけではないのです。

第四に、他の多くの仏教教団や西洋に出現した他の新宗教と違って、創価学会は社会学者が「現世を肯定する」志向性と呼ぶ性格をもった運動です。それは社会的な経験に積極的に向かうことを保証するという意味で、「生活を高める」志向性をもっていることができません。従って、他の要因から生まれた「積極的思考」という倫理を強調する時代にあつて、創価学会は『法華経』や日蓮正宗などの古い教えから、人生を積極的に生きるという同じタイプの態度へ人々を導く論理を生み出していったのです。

第五に、創価学会運動の教えは、宗教を、苦難に満ちた現世での人生を死後に（天国に行くとか、極楽に行くとか）保証するものとしてでなく、今世での人生に利益（功德）をもたらす道具と見なし、いく見解を広めています。その教えは禁止や抑制ではなくて自由に焦点が当たっています。そのために、伝統宗教の道徳的束縛を人

生の障害物であると考えていた人々に対して、創価学会は強く訴えかけることができるのです。様々な道德規制のカタログの代わりに、そこにはあるのは一般的な「責任の倫理」のみです。それに従って、個人は正しい行為を行う道を、独力で決定していけばよいのです。

第六に、創価学会は在家の人々による団体ですので、古い教化組織（や仏教寺院）が必要とする多くの装置を不要にすることができます。多くの会合は家庭でもたれますが、それは宗教の行きすぎた制度を解体し、私的なものにする、現代の傾向に一致したものです。従って、創価学会は教会制度や寺院制度から解放されているのです。

第七に、メンバーはしばしば地域グループにおいて、いわゆる相互カウンスリングのために共に集まります。これは社会の非人格性が他の自発的支援機関を崩壊させてしまう現代社会において、各個人の行動にグループが支持を与えるものです。地域のリーダーは、犯した罪を戒めるためではなく、日常生活において発生してくる実際の諸問題に対処する自信を与えるために、指導と助

言を行います。

第八に、創価学会は外向的な宗教であり、芸術的な表現と創造性をもつ、実に様々な文化的社会的活動を支援しています。

第九に、創価学会は極めて行動的な性格をもっており、メンバーに他の人々を信仰に目覚めさせるように促します。これは、彼らが信じる教えと実践を広めようという積極的な関心と共に、メンバーが彼ら自身の生き方を手本として示すことで達成されます。これらの方法を実践することによって、個々のメンバーの信仰はさらに強まるのです。

最後に第十として、創価学会の理念全体が、この人生での幸福を正当と見なします。伝統宗教、特にキリスト教は、罪を教え込み、人生において悲劇や苦難に遭遇すると懺悔（罪を悔いる）を説きます。しかし、創価学会は罪の概念を持ちません。強調されることは、各人は苦難を乗り越えることができ、幸福になる権利を持っているのだという点です。深い信仰による実践は、幸福になるのを助けるのです。

三 イギリスSGIメンバーの

属性と入会過程

それでは、創価学会に入会し、日蓮仏教を信奉する人々は、どのような人々なのでしょう。ベルギー・ルーバン大学のカレル・ドベラーレ教授と私はイギリス・メンバーの調査を行い、六二〇名から回答をもらいました。それらの回答者の性別から会員全体の男女分布がわかりますが、六〇%が女性で、四〇%が男性でした。その割合は、他の多くの宗教団体と同じようなものでした。

我々が関心を持ったのは、特にイギリスに在住する日本人でないメンバーでしたので、それらの回答から日本人とわかる名前のもは除外しました。しかし、日本人を除外した残りの中でも、約二五%は外国生まれの人たちでした。——これはイギリス創価学会が国際色豊かなメンバー構成をなしていることを意味し、この点では、イギリスにおける他の宗教団体には見られない特徴でした。そしてさらに言えることは、外国からの移民は、し

ばしば独立心の強い人々であり、自分自身の足で大地に立ち、なじみの薄い文化と折り合いをつけていこうという積極性を持った人々であります。そのような人々が個人の責任を強調する宗教を信奉したとしても、驚くべきことではないでしょう。

このようなメンバーが、どの様にして最初に創価学会と出会ったのかという問題は、社会学上の理解にとつてだけでなく、宗教団体の戦略にとつても、重要な問題です。

宗教運動は、しばしば、その存在を人々に知ってもらうために、広告宣伝や講演会、その他の広報手段に力を注ぎますが、実際に新しいメンバーを引きつけるものは何でしょうか。この問題についての我々の発見は、疑う余地のないものでした。実に九四%のメンバーが、配偶者やパートナー、親戚、友人そして同僚の働きかけによって、創価学会と接触することになりました。友人は、もつとも影響力が強く、四二%が最初に創価学会を知ったのは友人によると答えており、二三%が配偶者、パートナー、または家族からと答えています。

わずか六%の人々のみが、広告宣伝や展示会、マス・メディア等々によって知ったと答えたにすぎません。「折伏」と時に称される「個人的証言」は、明らかに新しい改宗者を得るための効果的な方法だったのです。この発見は、様々な宗教団体が用いている布教手段のうち有効な方法は何かという問題を研究する上での総体的な結論となります。

他の多くの宗教と比べて、創価学会が極めて異なっているように思われる点は、何人かのメンバーが最初に出会ったときの場所や状況です。その中には、ナイト・クラブやデンマークのコペンハーゲンでのディナー・パーティー、バブでの見知らぬ人から、長寿になるための食事法の講演会、占星術の教室などがありました。一人の回答者は、「私の友人の母親は、あるパーティーでメンバーと出会いましたが、そのとき彼女が私に言ったことは、私は何か陰謀に巻き込まれているのかしら、何故なら、仏教徒は決してパーティーなどに行かないものと思うから」と語っておりました。

さて、ナイト・クラブや新しい医療方法を試みるセン

ター、占星術の教室やバブ（酒場）などは、そこでイギリス国教会への加入を真剣に誘われるなどとは思えない場所です。ましてや（もつときまじめな）メソヂイスト教会やバプティストに勧誘されることなどは、ほとんどありません。しかし、他の回答者が述べていたことです、「我々のリーダーは、聖人君子ではないので、バブにも行けば、『隣の人々』というイギリスで人気のあるテレビのホーム・ドラマも見たりします。……彼らは普通の人間なのです。仏教徒は、普通の人々なのです」。

四 入会動機とその変化

最初の出会いは一つの重要な事柄ですが、その出会いが必ずしも加入に結びつくわけではありません。入会するためには、また何らかの明白な魅力がなければなりません。従って、我々はメンバーに、入会したとき創価学会の何が彼らを惹きつけたのかと質問しました。

彼らを惹きつけた最も重要な第一の要素は、彼らが会った人々、つまり既にメンバーになっていた人々の「人

柄」「人間としての資質」でした。三七%が、メンバーの人柄に感動したことが最初の主要な入会動機となったと述べています。メンバーが持っていたある何か、活力・エネルギー、陽気さと言えるようなものが、部外者の彼らをして、そのような資質を与えてくれる教えについて、もつと知りたいという気持ちを起こさせたのです。

二番目に強かった魅力は、「唱題」は功德を得る有効な方法であるという期待でした。この功德とは、通常、物質的に豊かになる顕益という意味です。二〇%が、実体としての功德を生む団体としての創価学会に惹かれたと答えています。

しかしながら、同じメンバーに、この調査が行われた時点で、いま、この運動の何に惹かれるかと質問すると、強調点は大きく変わりました。入会時にメンバーの人柄に惹かれた人が三七%もいたのに対し、わずか一四%が現在でも主要な魅力だと答えているにすぎません。

何が起こったのでしょうか。メンバーの人柄が良いの

を当然と思ってしまい、それに慣れてしまったのでしょうか。または、メンバーたちをよく知れば知るほど、魅力があせてしまった、さらには幻滅してしまったのでしょうか。

そうではなくて、考えられ得る説明は、次のようなものです。この運動が、そのメンバーのかんりの部分を、他の異なった価値を受け入れるように効果的に教育できた、社会化できたということです。特に、創価学会が主張する使命の倫理的な次元、たとえば、世界平和であるとか、環境への関心などを、重視するメンバーの割合が著しく増えているのです。

この運動との最初の出会いは、わずか三%の人が彼らを惹きつけた主たる要因であると答えているにすぎませんが、いまや一八%のメンバーが、こうした問題への取り組みが引き続いて彼らを惹きつけている要因だと答えているのです。

さて、新しい宗教のメンバーに関して二つの見解が、しばしば提出されます。その一つは、新宗教運動へのメンバーは、ある種の「探求者」と特徴づけられるだろう

という見解です。探求者とは、個人的な宗教的真理や価値を探し求めている人々や、個人的な問題、知的な、または感情的、倫理的問題を抱えていて、その解決を模索している人々をさします。

もう一つの見解は、しばしばキリスト教の聖職者やジャーナリストによって提出される仮説なのですが、新宗教は、以前の宗教から信者を横取りしているというものです。しかし、この二つの見解のいずれもが、創価学会には当てはまらないように思われます。回答者の四分の三以上が、以前にはいかなる宗教団体にも所属していませんでした。残りの人々のうち、以前はローマ・カトリック教会の信徒だった人（イギリスでは、極めて少数なのですが）が、不釣り合いに高い数値の八・二%を占め、それに対しイギリス国教会員は六%、その他の非国教徒だった人が三%おりました。

メンバーたちは総じて、宗教的な探求者ではありませんでした。彼らは創価学会を宗教との関連で発見したのではありませんでした。また、メンバーの多くが、何らかの宗教的背景を持っていたわけでもありません。全体

として、メンバーたちはとりわけ宗教的探求者ではなかったと言えます。

また特定の宗教団体に属していたことが、彼らの宗教的信仰への可能性を消耗させてしまっているわけでも、もちろんありません。そこで我々はメンバーに、創価学会に入会する以前から、自分を宗教的な人間、信仰心のあるものと見なしていたかどうかを質問しました。その結果、四七%が、以前は宗教的であったわけではないと断言しました。わずか八%が、人生の意味、宗教的意味を求めていたと答え、さらに六%が以前から宗教に関心を持っていたと答えました。この両者を併せた一四%が、宗教的探求者と言えるでしょう。

以上の結論を申せば、創価学会のメンバーは以前から宗教的な人々であったわけではなく、この運動が以前教会員だった人々をリクルートしたわけでもなく、大多数のメンバーは唱題について初めて学んだときには、宗教を積極的に求めていたわけではないと言えます。

五 唱題の意義

他の何にもまして、我々は唱題というものがメンバーの生活においていかなる位置を占めているのかを発見したいと考えました。すべてのメンバーが一日二回の勤行唱題をしているわけではありませんが、約五一%が規則正しく日々の唱題をしていると主張しました。

何のために唱題するのか質問しました——このような厳しい宗教的修行にも似た行為のなかで、メンバーは何を求めていったのでしょうか。九六%ものメンバーが、自分たちは特定の目標を実現するために唱題していると主張しました。それはちょうど、かつて大石寺に参拝した時、御本尊の前でイギリスのリーダーが「買い物リストをもって御本尊の前にもうでてはいけない」と警告したような、唱題信仰でした。

最も頻繁に唱題して願う事柄は、より良い経歴をつけて、より良い仕事に就けるようにということです。約半数のメンバーが、配偶者やパートナーとの、またガールフレンドやボーイフレンドとの、時には仕事仲間との

人間関係を改善したいと願っていました。そしてほぼ同じくらいの人々が、物質的功德——より良い家や車が手に入るように、また時には宝くじに当たるようにと祈っていました。自分の健康や幸福は、五分の二の回答者が願っていました。五分の一のメンバーは、他人の幸せを祈っており、同じく五分の一は、自分自身の態度が変わるようにと祈っていました。

キリスト教の主流派教会で人々が祈る目標について調査したわけではありませんが、彼らの多くが人間関係の改善という特定の目標に向かっていているということはあり得ません。また、祈りのなかでの願いが、極めて特定の具体的目標に向かうことは通常ありません。しかし、創価学会のメンバーは彼らの信仰が実際的な問題を解決する実践的な性格の信仰であることを強く断言します。

唱題は、主観的な世界を変える装置であると確かに主張されますが、そのための方法ではありません。それはまた、宇宙に遍在する法の隠れた力を引き出すための一つの道であるとも考えられています。その宇宙に遍満する法は、人間の態度や主観的な傾向性に影響を及ぼ

すのと同じように、客観的な出来事や現象にも影響を及ぼすと見なされています。

メンバーは「唱題は効き目がある」と主張します。五五%の人が、彼らが唱題のなかで願ったことが、そのとおり実現したと信じていました。彼らは唱題で願った項目のリストを用意してくれ、そのうち実現した成功を示してくれました。その中には、財政的に行き詰まり自殺まで考えていた人が、予期していなかった突然の財政援助によって助かったケースのような、即座に護られた体験がしばしば含まれていました。幾つかの印象的な主張がありました。その中で最も劇的であった体験は、美術の先生の例でした。その成功体験を、彼自身の言葉で語ってもらいましょう。

「人は精神的なものを物質主義と分けて考えがちです。しかし、貴方が何かを願えば、それが実現することが明らかになったのです。私は、最初、お金が欲しくて唱題していましたが、それをほとんど罪深いことと感じていました。私は、『自分は何が欲しいのか』と考えました。最初は、家の改築を完成させるお金が欲しかったので

す。増築を終了させるため数千ポンド(五〇一六〇万円)のお金が必要でした。家や土地を抵当にとってお金を貸す商売がありますので、もう一度、家を抵当に入れるべきかと考えました。しかし、わたしは『くじ』で賞金を稼ごうと考えました。そんなことはこれまでやったことがありませんでしたが、わたしたちはDIY(Do-It-Yourself)ストアに行きました。そこではテキサス・ホーム会社が金の延べ棒の賞金を出していました。三回、そのくじを買い、三回目に最後の二人になって、競い合うことになりました。くじの用紙に、何か好きな言葉を書き込んで、最後の勝負に挑みました。そして勝ったのです。

当時、妻は病気がちでしたので、渋々二回目の抵当を設定することに同意していました。その抵当権会社からの書類と、くじの賞金を獲得したという通知が、同時に郵便で届きました。金の延べ棒で、七千ポンドを私たちは獲得したのです。そして、それを受け取る会場となったロンドンのヒルトンホテルに、仕事を休んで行きました。お金を得るために唱題し、それがなかったのです」。

以上の話は、極めてはつきりした「顕益」の例ですが、それだけでなく、個人の性格や傾向を変える「冥益」の報告も多くありました。約五分の二のメンバーが、自分はこの信仰によって「自信を得た」「自己をコントロールすることができるようになった」「生活を変える力を獲得した」などと主張していました。また、五分の一の人は、特に、彼らの人生観が大きく変わり、他者への態度が変わったと述べています。他にも、慈悲の心や他者を無私に愛する心が強まり、さらには心の平安を得たという回答もありました。

六 自立精神と創価学会

ある運動へ積極的に参加しているメンバーからの回答としては当然かもしれませんが、創価学会の場合も彼らの信仰への熱心な主張が多く見られました。回答の中には、疑問や躊躇の言葉はあまりなく、ましてや批判めいたものは極めて少数でした。これはメンバーたちが、自分が信奉する宗教に満足しており、その信仰による功德を確信していることを示します。

創価学会のイギリス・メンバーは、自立心、独立心を持った人々でした。彼らの半数以上は、SGI(創価学会インタナショナル)の中に自分の家族はおられません——つまり、かれらは自分自身で決断して入ったのです。彼らは、また、圧倒的に若い人々です——とは言っても、平均年齢二二または二三歳の若者を勧誘する他の新宗教運動の会員ほどに、極端に若いわけではなく、全体の人口分布に比べると若いということです。メンバーの四分の三は、二五から五〇歳の人々です。六%以下が、二五歳以下でした。

自立心の高さは、メンバーの職業選択の独自性においても反映していました。九%は、社会福祉関係の介護の仕事をしていましたし、一三%は舞台芸術に関係する仕事に就いていました。八%は工芸やグラフィック・アートの仕事をしていました。さらに、教師や研究者、メディアや広報関係の仕事に就いている人を加えると、全体の四〇%以上のメンバーが、この種の仕事に就いています。これらの仕事は、自分の仕事を自分で取り仕切る、極めて自立性の高い職業です。その中では、個々人の責

任が強く要求される役割を果たさなければなりません。

自分自身の足で立ち、彼ら自身の個性を大いに発揮している自立的な人々の姿は、マス・メディアがしばしば好んで使う「セクト」とか「カルト」と言われる新宗教のメンバーが持つ「得体の知れない人間集団」や「洗脳されたゾンビー集団」というイメージとは、大きくかけ離れています。創価学会についての我々の研究からは、そうしたイメージを裏付けるものは何もありませんでした。

平均的な教育レベルの調査結果から、以上の結論がさらに裏付けられます。調査対象の約五〇%が十八歳以上の教育を受けていましたし、一二%が大学卒の学位を持っていました。さらに七%は学位と他の専門家としての資格を持っていましたし、三・七%は更に高い学位を持っていました。つまり合計で二三・六%が大学の学位やその他の資格を持っているのです。この高い教育レベルの人々の割合は、イギリスにおいて知られている他の宗教運動を大きく引き離しております。

それでは、なぜ創価学会は、以上のような専門職に就

く、高い教育程度の人々を多く惹きつけるのでしょうか。

回答者の多くは自由契約制の仕事、または自営業の人々でした。彼らは独自の起業家精神や柔軟性、そして何よりも強い自信が要求される職業に従事しています。その場合、その仕事に成功するか否かは運まかせのところがああり、幸運に恵まれることが必要です。そうした幸運が幸いするかどうかについて、メンバーはカルマと考えるでしょうが、そのカルマは一心な唱題の力によってより良くなるのが可能なのです。上記のような起業家精神に満ちた人々にとって、彼らの状況を守るためにできる、もう一つの手段——彼らの言葉で言えば、精神的宗教的な「保険」——をとれるということは、大きな魅力なのです。メンバーが信じているように、もしも唱題が自信あふれる態度の形成に役立つならば、それ自体が、彼らの成功に必要な道具や条件の一部であることは言うまでもありません。

自分自身の人生と状況に責任をとる必要性を、創価学会は強く主張していますが、それがまさに自営業に従事する人々の必要条件と一致するのです。更に、一方で教

育や環境問題に関心を持つ多くのメンバーは、現代イギリス社会での知的階級の人々と見解が一致しており、他方、創価学会運動が奨励する創造的で文化的な表現方法はグラフィック・アートや舞台芸術の専門家の関心を補うものであります。そして創価学会の全体的な理念の根底にある慈悲や愛他精神は、社会福祉関係の介護の仕事に就いている人々の動機と著しい親和性を示しているのです。

これら二つの専門職業集団にとって、一つの宗教的な弾み、起動力をつけ加えることができます。それは善行を刺激するためのメカニズムとして「罪」という考えを、この宗教は否定し、メンバーが道徳的禁止による抑圧と見なすものを捨て去ってしまうことです。伝統宗教の古い道徳的秩序——は否定され、精神を解放する方法強調する道徳秩序——は否定され、精神を解放する方法（唱題）を信奉することへ積極的に向かわせるのです。

遠く離れた国に根づいた、古代に起源を持つ信仰としては、創価学会は現代の西洋社会の多くの人々に驚くべきほどに訴える力を持っています。創価学会の理念は、

今日の消費経済が要求する倫理と、消費経済を維持するために必要な一定の制約をもった快樂主義と適合しています。その価値観は、また、現代人の主要な文化的余暇的な関心の中に、十分に反映されているように思われます。

また、難民問題や自然災害の被害者を救済する運動などによって表明されている、環境や教育、平和などの領域において創価学会が目指す目標や、世界を包み込む慈悲の心は、西洋世界において啓発的な意見を持つ人々の間に、十分な共鳴者を見い出しています。そのような社会的風潮の中で、個人の責任を教え、受け身的な反応しか生み出さない罪の概念を否定する宗教、そして何事にも積極的に考えていく態度を賞賛し、生活や人生を高めていくことに関心を持った宗教は、多くの人々に、まさに時にかなった信仰であると感じさせることは間違いありません。

七 創価学会運動が果たしている社会的役割

これらの特徴を創価学会が有しているとなると、現代

西洋において創価学会を単純にセクトと見なすことはできないことは明らかです。教会とセクトとの古い分裂の時、分裂して生まれてきた少数派集団を、ある社会において国教のようなものとして制度化されていた主流宗教からの分派であると思なすことはできませんが、それはSGIが西洋世界において展開したときの状況ではありません。SGIは、土着の宗教との関連性から生まれたカテゴリーへの分類を許さない、異なった宗教的伝統を代表しています。

従って、創価学会をセクトと評価するのは誤りです。なぜなら、セクトという述語は社会学者によって価値中立的に用いられる場合でも、その社会に根づいて確立した伝統内部での分裂という意味合いを含んでいるからであります。それは規模も小さく、世俗文化を拒否し、メンバーをいわゆる「宗教的美徳」と定めたものの中に閉じこめてしまい、厳しい規則と罰則規定をもった団体という意味合いを含んでいるのです。これらセクト主義運動が持っている特徴のいずれをも、西洋で展開している創価学会には当てはめることはできません。

その役割の一つは、日本仏教を再生したことです。それは様々な意味において機能を停止していましたが、現代社会の大衆に効果的に接する能力を失っていました。在家運動であることは、この点において重要です。つまり、その強力な宗教精神が僧侶階級の内部に閉じこめられてしまうことがないということです。創価学会が布教に懸命に取り組み、人々に善意や慈悲、不屈の精神、そして積極的思考の重要性に気づかせるために多くの注意を払ってきたことは、まさにこの運動が、人々の日常生活のなかで遭遇する様々な問題を解決する方途を提示する倫理を広めようとしている「真に実践的な宗教」であることを物語っております。

創価学会はまた、国家と個人の間を媒介する機関の一つです。近代社会は、そうした媒介機関が人間的な方法で働くことに依存しています。発展した産業社会においては、そのような媒介機関が必要であることを主張した人物が、他ならぬエミール・デュルケムでした。都市の発展によって、生活は遠距離通勤となり、非人間的な役割関係が中心となって、基本的な人間的価値を脅かして

おそらく、創価学会は「新しいデノミネーション」の一つと考えることができるでしょう。西洋におけるそれは、起源においても、忠誠心においても、西洋における先行事例とは直接の関係を持たない、独立した運動 (autonomous movement) を指します。

より広い視点から言えば、創価学会は明らかに仏教デノミネーションです。しかしそれでも、創価学会は西洋に古くから定着している他の仏教とは、ほとんど何の関係もありません。西洋の創価学会メンバーは、また、日本の歴史における仏教の各派への分裂にも関心を持っておりませんし、あるとしても日蓮の歴史に登場し、彼の真実の教えを誰が継承したかということに関するぐらいです。

最後に、創価学会のどのような点が、世界各地に展開した宗教としての一般的特徴と言えるでしょうか。私とドベラーレが行った研究と、日本の創価学会についての限られた知識からの話になりますが、あえて言うならば、創価学会は一種の再生運動 (revitalization movement) と見なすことができるでしょう。

います。そうした社会の中で、創価学会のような運動が、その会員の間の絆を通して新しい人間共同体を維持するための新しい責任意識を育むことができるのです。

小さな人間集団の形成を促し、相互に助言、相談し合えることの重要性を再度強調し、個人と集団との間の調和を強調することなどによって、創価学会は、共通の意識の共有が危険にさらされ侵食されている社会において、人々の社会的結合を強化することのできる一つの運動、機関なのであります。そのような努力は、健全な環境政策や難民の定住促進、教育の推進、世界平和への関心などの、より広い、より公共的な分野においては、ますます重要なのです。そうした事柄のために、創価学会が非政府機関として広く活躍していることは、多くの人々に既に知られているとおりであります。

(フライン・R・ウィルソン／オックスフォード大学名誉教授)

(訳・なかの つよし／創価大学教授)

(本稿は一九九七年十一月五日に行われた当研究所主催の特別公開講演会での講演原稿です)

ヨーロッパにおけるカルト論争⁽¹⁾

ジェイムス・A・ベックフォード

中野 毅／ウルバン長井陽子 訳

一 はじめに

私が日本および創価大学を前回訪問したのは、一九七八年の春でした。この時期、西ヨーロッパやアメリカにおける新宗教運動 (New Religious Movements) は激しい論争の的となっていました。⁽²⁾ ヨーロッパの諸国は「カルト恐怖症」になっており、マスコミは連日、統一教会、神の子どもたち (現在はファミリーに改称)、サイエントロジー、国際クリシュナ意識協会 (略称 ISKCON)、神の光教団 (現在はエラン・ヴィタル Eran Vital と改称) といっ

た新宗教運動のメンバーたちが行ったとされる非道な行為について、センセーショナルな話題を報道していました。カルト論争についての私の著書および他の諸論文⁽³⁾の中で、私もカルト論争の原因、形式、結論について分析を試みました。

一九七八年当時、日本ではまだ新宗教運動についての興味は比較的薄かったのですが、子どもが統一教会に加入してしまった親たちの会のリーダーにインタビューをしました。このグループは彼らの子どもたちが、いわゆる「洗脳」されたことに抗議していました。また彼ら

は、日本の統一教会のメンバーが全財産を投げうって教会に寄付し、自らはひどい環境の宿泊施設に住まなければならないことを批判していました。しかし、こうした新宗教運動に対する抗議運動に対して、一般社会からの支持はほとんどありませんでした。⁽⁴⁾

私はまた、統一教会の創始者及び教主である文鮮明氏の政治やビジネスとのコネクションを調査していたジャーナリストたちにもインタビューしました。彼らは、文鮮明氏のビジネスにおける不正行為と、アメリカの首都ワシントンで韓国の利権のための不法なロビー活動に彼が関与している疑いがあると語っていました。統一教会に関する大衆向け書物はいくつか出版されていました。が、当時、論争の焦点となっていた新宗教運動についての学術的研究は殆どなされていませんでした。

いずれにせよ、一九七八年当時、日本では「カルト問題」は重要な問題とは考えられてなかったのです。何故なら比較的少数の青年しか、日本では新宗教運動に関わっていなかったからです。大学生が集団で「洗脳」される心配もほとんどなかったのです。事実、日本の統一

教会会員は、多くが韓国出身者か外国人でした。ですから、この問題は日本の問題として広く捉えられておらず、むしろ他の国々の問題と見なされていました。

しかし一九七八年以降、「カルト論争」は日本を含む多くの国々でさらに激しくなりました。一九七八年十一月、ガイアナのジョーンズタウンで九百人以上が死亡した人民寺院事件⁽⁵⁾、テキサス州ウエコのブランチ・ダビディアン教団施設で起った八十人以上の死亡事件⁽⁶⁾、フランスやカナダでの太陽寺院信者六十九名の死亡⁽⁷⁾、一九九五年オウム真理教による東京地下鉄サリン事件で十二名が、同じ毒ガスによる松本市で七名が死亡した事件⁽⁸⁾。一九九七年南カリフォルニアにおけるヘブンス・ゲイトによる集団自殺等が起りました。

これらの事件に対するアメリカやヨーロッパ各国政府の反応は、日本政府の反応ほど断固たるものではありませんでした。日本では宗教団体に法的資格を与える法律、つまり宗教法人法を即座に改正しましたが、欧米諸国の対応は、まちまちで一時的なものでした。⁽⁹⁾ そこで本稿では、イギリス、フランス、ドイツの三ヶ国における